

2019 年 11 月 17 日（日）「捨てられた神」

マタイ 26:57-68

57 イエスをつかまえた人たちは、イエスを大祭司カヤパのところへ連れて行った。そこには、律法学者、長老たちが集まっていた。 58 しかし、ペテロも遠くからイエスのあとをつけながら、大祭司の中庭まで入って行き、成り行きを見ようと役人たちといっしょにすわった。

59 さて、祭司長たちと全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える偽証を求めている。 60 偽証者がたくさん出て来たが、証拠はつかめなかった。しかし、最後にふたりの者が進み出て、 61 言った。「この人は、『わたしは神の神殿をこわして、それを三日のうちに建て直せる』と言いました。」 62 そこで、大祭司は立ち上がってイエスに言った。「何も答えないのですか。この人たちが、あなたに不利な証言をしています、これはどうなのですか。」 63 しかし、イエスは黙っておられた。それで、大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」 64 イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」 65 すると、大祭司は、自分の衣を引き裂いて言った。「神への冒瀆だ。これでもまだ、証人が必要でしょうか。あなたがたは、今、神をけがすことばを聞いたのです。 66 どう考えますか。」彼らは答えて、「彼は死刑に当たる」と言った。 67 そうして、彼らはイエスの顔につばきをかけ、こぶしでなぐりつけ、また、他の者たちは、イエスを平手で打って、 68 こう言った。「当ててみろ。キリスト。あなたを打ったのはだれか。」

【序論】

聖書の中でも、とりわけ主イエスの受難物語は、そこに書かれている言葉の表面だけを読んだのでは理解することができない奥深さをもっています。アイロニーと言いますか、著者が意図している一種の皮肉が隠されているのです。著者はそれを読者に読み取らせようとしていますから、説教者とはできる限りそれを解き明かさなければなりません。今日は主イエスが法廷に立たれる場面を見ていくこととなりますが（本格的な受難の始まり）、注意深く読んでいきますと、おかしいことが数多く見えてまいります。開廷の動機も、裁判が行なわれた時間帯も、答弁の内容も、議長を進め方も、すべてがおかしい。しかし、そのおかしい裁判の中に真理が垣間見える部分もある。主イエスのふるまい、主イエスの言葉の中にそれを見ることとなるでしょう。当時の裁判事情を調べつつ、この箇所理解に努めたいと思います。

【本論】

本論 1. 深夜の開廷

イエスをつかまえた人たちは、イエスを大祭司カヤパのところへ連れて行った。そこには、律法学者、長老たちが集まっていた。(26:57)

ゲッセマネの園で捕縛された主イエスは、待ち構えていた人々の許に連行されました。ここには「大祭司」「律法学者」「長老」という人々が出てきます。この集団はユダヤ教最高議会のメンバーであり、夜中であるにも拘らず法廷が開かれようとしている。まず引っかかるのは、開廷される時間と場所です。普通、ユダヤの議会は午前中に神殿の一室で行なわれました。それなのに、今は夜中であり、場所は大祭司の家の中なのです。どことなく隠れた場所で（人目を避けて）この裁判が行なわれようとしている感が否めません。ここに集まっていた議員は、もちろん全員（71 人）ではないでしょう。3分の1の人数が集まれば定足数と見なされました。議員の中には、アリマタヤのヨセフのように、イエス殺害計画に賛同していなかった者もいましたが（ルカ 23:50-56）、そういう反対分子は最初からお呼びでなかったのでしょうか。イエスを必ず死刑に定めると意志を固めた者たちだけで集まっているのです。この時点でまず裁判は公平性を欠きます。59 節には「イエスを死刑にするために」と、その目的が書かれており、他の選択肢は端から除外されているのです。

実は、マタイ福音書には裁判の全貌は描かれておらず、ユダヤ教の宗教裁判 1 回、国家権力者（ピラト）の裁判 1 回という短縮版になっています。しかし、四福音書の記事をつなげていきますと、主イエスは少なくとも計 4 回の裁判を受けていることが分かる。

- ①前大祭司アンナス（カヤパの^{しゅうと}）の邸宅での裁判（ヨハネ 18:13, 19-24）
- ②現大祭司カヤパとサンヘドリン（マタイ 26:57-68、マルコ 14:53-65）※今日の場面
- ③夜明け直後の公式法廷（マタイ 27:1、ルカ 22:66-71）
- ④ローマ総督ピラト（マタイ 27:11-26、マルコ 15:1-20、ルカ 23:1-6//ガリラヤ領主ヘロデ・アンティパス（ルカ 23:7-12）//ルカ 23:13-25、ヨハネ 18:28-19:16）

このように、主イエスは不眠不休で疲労の極みにあるなか、あちこち引っ張り回された挙句、鞭打たれ、十字架を背負わされ、その十字架に架けられるのです。

しかし、ペテロも遠くからイエスのあとをつけながら、大祭司の中庭まで入って行き、成り行きを見ようと役人たちといっしょにすわった。(26:58)

ゲッセマネでの捕縛の際、他の仲間たちと共にひとたび逃げたペテロでしたが、死に至るまでも主に従い抜くと誓った手前、どうにか戻ってきて状況を見届けようとします。

ヨハネ福音書によると、どうもヨハネも一緒だったようで、ヨハネが大祭司と関わりがあったおかげで近づくことができたと書かれています（ヨハネ 18:15-16）。とにかく、ペテロは主イエスに近づきたいという思いをもちながら、反対に離れていってしまう。信仰告白が求められる決定的な場面で主を三度否んでしまいます。マルコ福音書によると、カヤパの邸宅での裁判は2階の広間で行なわれていたようで（マルコ 14:66）、ペテロはどうにか入り込んだ中庭から、大祭司のしもべの一人に扮して裁判の様子を窺っている。敵陣の真っ只中に来たわけですから、人間的に見て勇気ある行動です。しかし、事態は思わぬ方向へと進んでいってしまいます。

本論 2. 偽証と沈黙

さて、祭司長たちと全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える偽証を求めている。偽証者がたくさん出て来たが、証拠はつかめなかった。（26:59-60a）

この裁判はあくまでも「イエスを死刑にするため」のものです。結論ありきで、最終的にどういう評決となるかはもう決まっているのです。あとは辻褄合わせをするだけ。証人として立てられる者たちは、当然サンヘドリンの息がかかっており、イエスにとって不利な証言を口々に語ります。ところが、証言が一致しない。これは不思議なことです。被告人に有罪判決を下すためには二人以上の証言が一致しなくてはなりません（民数 35:30、申命 17:6、19:15）。それなら、前もって口裏を合わせておくこともできたでしょう。しかし、この証人たちも付け焼き刃で集めたのか、サンヘドリンの詰めの甘さが見られるところです。

しかし、最後にふたりの者が進み出て、言った。「この人は、『わたしは神の神殿をこわして、それを三日のうちに建て直せる』と言いました。」（26:60b-61）

ついに一致した証言が出てきました。元より主イエスの神殿に対する態度というものは、かなり問題視されていたでしょう。「宮清め」は決定的でした（21:12-13）。主は腐敗した神殿宗教に対して怒り、神殿の主である神が汚されている現状を嘆いて宮清めをなさったのですが、神殿を管理する者たちの目には冒瀆と映った。そして、この事件の時に主イエスが口にしたことばがここで取り上げられたようです。

そこで、ユダヤ人たちが答えて言った。「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちに見せてくれるのですか。」イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。（ヨハネ2:18-21）

この時の主のことばは比喻として語られました。主はご自身を「神と人が出会う場所」すなわち「真の神殿」と表現されたのです。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」(ヨハネ 14:6)

私たちは主イエスを通して神と出会うことができる。主イエスを見た者は神を見たと言われる(ヨハネ 14:9)。その意味で、主イエスは神殿そのものとして世に来られたのです。しかし、このことばが語られた当時、その意味を理解できる者はいなかった。多くの誤解が生じたと思われます。「この神殿を壊してみなさい」とは、主の言われる意味においては、十字架で殺されることだったのですが、人々の耳には「建物としての神殿」が破壊されることにしか聞こえませんでした。そして、この法廷の場において、更に曲解された解釈でもって偽証されたのです。証言者はイエスが自らの手で神殿を破壊すると言ったというニュアンスで伝えています。しかし、主イエスは実際にはご自分が受動的に殺されるという意味で語られたのであった。本来ならば、ここで主は弁明してもよかったはずです。「私はこういう意味で言ったのだ。自分の手で神殿を壊すなどとは言っていない」と。しかし、主は何の弁明もなさらない。

主は何故に黙しておられるのでしょうか。この沈黙の意味は私たちには分かりきれません。既に判決が決まっていることを知っていたので、弁明は無意味だと考えていたのか。飛び交う偽証に対して弁明することに価値がないと考えておられたのか。いえ、むしろ主はイザヤの預言の通りにこの場で振舞っておられたのではないのでしょうか。

彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。(イザヤ 53:7)

主イエスの沈黙は、かえってこの偽りの法廷を審いている。嘘は塗り固められるほど当事者の首を絞めていくものです。沈黙をもって心の奥底を見透かされることほど、嘘つく人を苦しめるものはないでしょう。

本論 3. イエスの自己証言

そこで、大祭司は立ち上がってイエスに言った。「何も答えないのですか。この人たちが、あなたに不利な証言をしています。これはどうなのですか。」しかし、イエスは黙っておられた。それで、大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」(26:62-63)

イエスの沈黙に耐えられなくなった大祭司は、自ら立ち上がり、切り札を出します。大祭司は議長ですから、この行為は越権と言えるのかもしれませんが。感情に任せてイエス

を追い詰めようとしたのではないか。しかし、彼の問いは悪意に満ちていたとはいえ、そして主イエスを有罪にするための決定的な問いであったとはいえ、重大な真理を含んでいました。「イエスとは何者であるか」という、究極の問いがここに投げかけられたのです。「**あなたは神の子キリストなのか**」。多くの人々が知りたがっていたこと。そうなのかもしれないし、そうでないのかもしれない。人々にとって、イエスは謎の男だったのです。

ここでの大祭司の言葉を少し丁寧に見ておきたいと思います。この時代、「メシヤ＝キリスト」と言うとき、民衆の基本的な理解は、政治的にイスラエルを解放してくれる王的人物でありました。「メシヤ」は「油注がれた者」のヘブル語（マーシアーハ）であり、ギリシャ語に直されると「キリスト」となります。王が即位する時に油を注ぐことから、王はメシヤとも呼ばれたのです。また、王は「神の子」とも呼ばれましたので、カヤパは「メシヤ」と「神の子」を言い換えているだけだと思われます。つまり、「お前は自分をイスラエルを救うメシヤ、神の子だと言うのか？」と問うていることになる。彼の問いはあくまでも地上的な意味であり、主イエスに「我こそはイスラエルの解放者なり」と宣言させようとしているのです。なぜこんな質問をするか。それは、もしそう答えたならば、イエスはローマ帝国と一戦を交えようとしている反逆者というレッテルを貼ることができるからです。帝国に訴える口実をつくろうとしている。では、それに対する主イエスの答えとは。

イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言っておきますが、
今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたが
たは見ることになります。」(26:64)

「あなたの言うとおりです」(Σὺ εἶπας) という部分は、新改訳 2017 では「あなたが言ったとおりです」、新共同訳では「それは、あなたが言ったことです」と訳されています。ニュアンスの違いが感じられるところですが、実際やや曖昧な表現であり、如何様にも捉えることができるのです。主は遠回しにカヤパの言っていることを肯定している。ただ、主ご自身はカヤパの言っている「神の子キリスト」と実際の自分自身の姿とは、かなり違う（あなたの言う意味ではまったく不十分だ）ということを次に説明していかれます。主はここで、再臨の主の姿を描いておられる。「神の子」を「人の子」（ダニエル 7:13）と言い換え、全宇宙の審き主というレベルにまでご自身を引き上げているのです。しかも、主はここで「**主は、私の主に仰せられる。『わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。』**」という詩篇 110:1 の聖句を引用しておられるようです。まさしく、ご自分を神と等しい者として描き直し、カヤパの質問をペしゃんこにするかのような返答をなさったのです。

本論 4. 捨てられた神

すると、大祭司は、自分の衣を引き裂いて言った。「神への冒瀆だ。これでもまだ、証人が必要でしょうか。あなたがたは、今、神をけがすことばを聞いたのです。どう考えますか。」彼らは答えて、「彼は死刑に当たる」と言った。(26:65-66)

言われていることを理解した大祭司は、義憤に燃え、本来してはならない、大祭司の衣を引き裂くという行為(レビ 21:10)をもって、イエスを断罪しました。彼は主イエスの自己証言を「冒瀆」と見なしました。実は、ここでは最終的な主イエスからの問いが法廷に居合わせる一人一人に投げかけられていたのです。いえ、すべての聖書読者に対する問いとも言えます。主イエスはご自分を神であると宣言された。その自己証言に対する反応の仕方は二つしかありません。第一は、主イエスのことばを信じ、受け入れ、礼拝するという道です。第二は、そのことばを斥け、とんでもない「成り上がり者」「冒瀆者」「ペテン師」と断罪する道です。つまり、主がここまでの宣言をなさったところには、認めるか否かの分かれ道が呈示されていたのです。

その結果は如何に。サンヘドリンはこぞってイエスを冒瀆罪に定め、死刑を言い渡しました。神が神として認められなかったのです。神を神としないことが罪なのではなかったか。人はその道を突き進んでしまう可能性がある。真理の御言葉を聞いて、尚も心を閉ざし得るのです。

そうして、彼らはイエスの顔につばきをかけ、こぶしでなぐりつけ、また、他の者たちは、イエスを平手で打って、こう言った。「当ててみろ。キリスト。あなたを打ったのはだれか。」(26:67-68)

いよいよ主イエスの本格的な受難が始まっていきます。信仰の目をもってこの状況を見つめましょう。神が人間にいいように^{なぐ}なぐられているのです。「冒瀆」と見なした者たちが、真の冒瀆を行なっている。顔に唾を吐きかけるという最大の侮辱をもって。そして、拳で、平手で殴りつけることによって。

ここで手を出している者たちが誰であったか、福音書によって内容が異なります。ルカは「イエスの監視人ども」(22:63)、マルコは「役人たち」(14:65)、マタイは「彼ら」です。マタイはこの罪をサンヘドリン全体に帰している。主イエスに目隠しをし、「預言者なら当ててみよ」という「リンチゲーム」が行なわれている。これが「神の民」が神に対して行なったことなのです。

【結論】

この裁判の真相を少しでもお伝えできるように努めました。これでも尚、不十分でありましょう。聖書は常に読者にメッセージを発信しています。今日の箇所はきっと、私たちに主イエスの自己証言を受け入れるか否かという問いを発していると思われます。イエスは神である。このことを受け入れなかった人々は闇の内を歩み続けました。一方、トマスのように「私の主、私の神」(20:28)と信仰告白をした弟子たちは、光の内を歩みました。そして、光となり、光を宣べ伝える者となりました。私たちはどちらを選択するか。今、一つの問いが私たちに投げかけられているでしょう。

【祈り】

光なる神よ。何とおぞましい人間の闇が描かれた箇所だったことでしょうか。偽りの法廷で、罪なき者が、それも栄光の神の子が罪に定められたのです。そして、その場で行なわれたリンチもまた、あってはならない行為でした。主イエスの自己証言が人間を二分したのです。主よ、私たちがこの方を否むことがありませんように。「私の主、私の神」との信仰を常に告白させてください。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、
御子イエスの裁く偽りの法廷を、我らのために黙して見つめ給うた、父なる神の愛。
偽証、冒瀆、リンチに耐え、屠られる羊そのものとなり給うた、主イエス・キリストの恵み。
主イエスの自己証言を受け留め、常に御前に信仰を告白させ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。